

エマスの『自然論』

尾 形 敏 彦

一

エマスは『自然論』(Nature 1836)において、自然が神と一致することを多くの例をあげて説明し、自然の完全性を暗示した。また、認識は自然を通して完全になってゆくということを例証しながら、自然が全体としてまとまりをもち、秩序立っていることを証明しようとした。さらに、存在証明が不可能であるために、精神として自然をとらえ、自然の奥に神が実在すると想像した。『自然論』の内容は信仰の領域に属するものであり、休まらずに祈れという声に救われたという(1)ような多くの体験から判断すると、エマスの思考は、実際には、これとは反対のプロセスを辿って、神から出発したものだと考えられる。『自然論』では、伝統を重視した当時の權威主義にたいする批判、新しい視点、人間と自然の間の関係などが強調されている。エマスは彼の唯心論のなかで自然をいかに位置づけたかを述べるために『自然論』を発表して、その反響を待ったと言える。

神がすべてのものに先行したということは、つぎのことから容易に考えられる。たとえば、日記に散見されるように、少年時代から自然のなかに没入すると、神と一体化した恍惚感を味わうことができるというような神秘的感覚を彼はもっていたということ。また、『自然論』のなかで、彼は自然界の事実と精神界の事実のアナロジ

ーを強調しているが、この感覚も少年時代からもっていたということなどである。その結果、彼が親しんだ自然のなかに神を発見するということに彼は抵抗がなかった。『自然論』はコールリッジ(S. T. Coleridge)の思想の影響下に生まれたものと見なして書かれた両者の比較論もある。⁽²⁾ たしかにそうではあるが、制度にとらわれ、独断に陥った既成宗教と功利的になった牧師達にたいする改革と糾弾の使命感からエマソンは心の声に従って、コールリッジの思想のみならず、多くの思想の影響をうけて『自然論』を書いたと言うべきであろう。エマソンの眼には腐敗した宗教が説く神は虚構にすぎず、彼は真実の神を求めようとしたのであった。これはエマソンの精神のなかに残るピューリタンの血が既成宗教の清浄化を彼に迫ったのである。Emerson's *Nature*, appearing in 1836, was *The New Testament*. とうような意見⁽³⁾はしばしば聞かれるが、決して不当なものではない。

エマソンは悟性を経験の対象を認識する能力、理性を超経験の対象を認識する能力だと定義した。そして、霊を絶対者として、当時の形式的な宗教を批判し、神意を反映するものとして自然を尊重した。すなわち、彼はキリストの代役として自然を使ったのである。

エマソンが説く霊の声は個人の良心の声と同じものである。エマソンは、たとえば、仏教の即身成仏というように直接に神(彼の言う霊)と人とを結びということをしないで、自然という媒体を使用したこと、日常生活的な例を多数用いて説教を煽動的な雄弁で展開したことなどのために、一部の革新的な人びとの思考や行動に勇気を与え、転換期の指導者になり得たのである。しかし、この日常性と説教者が用いる熱意に溢れるが飛躍する論理とがエマソンの思想を哲学にも宗教にもさせないで、宗教的人生論という領域にとどめたのだと私は言いたい。また、『自然論』では歴史と社会制度とをエマソンは無視したために——後のエマソンは歴史を重視した——それらを重視する人びとには『自然論』はなにも語らず、それらを超越した人びとにだけ雄弁に語りかけた。現代

的視点から見れば、エマソンは物質世界を象徴する精神世界を画いてみせた説教家であり、自然を象徴的に表現した詩人であると言えるが、当時のアメリカ社会という背景の前に立たせると、エマソンは人間主義の推進者であり、アメリカ史上トマス・ペイン (Thomas Paine) につづく煽動的雄弁家である。

『自然論』の冒頭は『アメリカの学者』 *The American Scholar* の書き出しの数頁と同様に革新的な姿勢を示している。時代を超越した積極的な意味をもっている。各時代はのりこえられなければならない、懐古的な態度は捨て去られなければならないからである。しかし、この前進的な態度はエマソンの一側面にすぎず、彼の革新的な態度はキリスト教会内部の改革という範囲にとどまっている。このことは読者に大きな失望感を与えるが、それにもかかわらず、部分的に取りあげるならば、また、彼の時代の教会の内部に置くならば、エマソンを革命家と呼んでもよいであろう。

『自然論』解釈には多くの困難がつきまとっている。地球が狭くなった今日、一見すると問題の解決が容易になったように思われるが、実は、すべてが複雑化するにつれて、また、歴史的背景の微細な相違が明らかになるにつれて、問題の解決が一層困難になったと言わざるを得ない。『自然論』に関しての困難な問題とは、たとえば、その背景にあるキリスト教の伝統や十九世紀前半のアメリカ社会というものについて理解などをさすのである。『自然論』のなかでも、自然を扱った部分(第五章まで)は比較的理解しやすいが、精神を扱った部分(第六章以下)の解釈は容易ではない。たとえば、一見すると、汎神論的に見えるが、エマソンの自然の奥には厳然として霊が実在するので、『自然論』は汎神論ではない。唯心論である。そのために、たとえば、一種の汎神論だと言える日本の仏教などとは無関係であって、比較することができないことを私は指摘したい。十七世紀イギリス文化を長くもちつづけたアメリカ文化社会における作家エマソンの位置は、神と人間とを結びつけようと試

みたものであるから、神がすべてを支配した中世と、人間を中心においたために個人の世界観に頼らざるを得なくなった近代との境界線にあると言える。

自作のエピグラフ（再版）に見られるように進化論的な考え方（第一回のヨーロッパ旅行から帰国後、この考え方をもち）を抱いていたことは、彼が人間は神まで上昇できることを、すなわち、人間が断層をとりこえて神に到達できることをかすかに暗示している。たとえば、マン（Horace Mann）の太陽のなかにすわる男の画をエマスは自分の肖像画だと思ったことや、ミルトン（John Milton）の天使ユーリアルと自分を同一視したことなどはこの可能性を物語っている。エマスの時代には現代のように複雑すぎて割り切れないということがほとんどなかったため、彼は物を破壊して霊の世界を築こうと単純に考えた。正確な結論を得ようとして、あらゆる可能性を考えてみるというようなことを彼はしなかった。もし、あらゆる可能性を考えたならば、結論が出ないだけではなく、彼自身の立場も明確ではなくなり、懷疑主義に陥ってしまったであろう。エマスはヨーロッパから帰国した時に、パリ植物園での啓示やカーライルの強い影響をうけて、自分の思想に絶対的な自信を抱き、この自信によって悪を消し去ったのである。エマスにとっても、カーライルにおけるように、善とは力をもつことであり、悪とは力のないことであった。しかし、エマスは心の奥では悪の存在を認めていたので、日記には、自分を励まし戒めるような文章がしばしば書かれている。

エマスはキリストを無視したので、彼の声が当時の熱心なキリスト教徒には悪魔の声のように聞こえたのは当然であろう。しかし、一部の人がとには新しい福音のように聞こえたことも事実である。従来の神をはじめとして人間を支えていたほとんどすべてのものが崩壊し、もっとも新しい支柱である科学にたいしてさえも、人間を機械の奴隷にするのではないかという懷疑の目が向けられ、前途には破滅だけが待ちうけているように思う現

代人にはエマスの声は独善、偽瞞の声としか聞こえないかもしれないが、前途に輝かしい希望をもち得た当時の開拓者達にはエマスの声は激励の雄叫びのように聞こえたであろうことは想像するのに困難ではない。しかし、彼が完全に人間中心の世界を創造するための革命を断行しようとしたのであれば、神は人間のなかに吸収されてしまったはずであるが、彼は新しい神と人間の世界を創造しようとしたのであった。ここにエマスの人間解放論とビュリタニズム復活とが神秘主義の衣をまとって表裏一体になっているのがうかがわれる。彼は精神革命を回転軸にして当時の産業主義社会に精神的な新風を吹き込もうとしたのである。しかし、エマスの神秘的傾向と、彼自身も告白していることだが、没論理ともいえる説教者の論理と、革新的エマスコ教確立の焦燥感のために、彼の計画は画餅に帰し、やがて南北戦争をへて、彼の唯心論は崩壊し、彼は道徳的説教家というような位置に落ちついたと言える。

エマスが計画した世界は信仰の世界であって、たとえば、ワーズワース (William Wordsworth) などのような感覚に訴える自然美に陶醉する浪漫主義ではない。自然の奥に実在する霊を見るために、エマスの自然では色と形は透明化されなければならないものであった。エマスの自然は無色無形である。

エマスは青年牧師としては説教壇で、牧師辞職後は講演壇で修辭法を磨いた。そのため、彼の文章は読むよりも聞く文章であり、散文というよりも詩に近いと言えるほど高揚しているところが多い。⁽⁷⁾彼の論理展開が曖昧で不正確なのは、前述のように彼が説教者の論理を用いているからにほかならない。彼自身それを知っていたからこそ、ロックやクラークやヒュームが行なったような推論機械のような仕事はできないと言ったのである。⁽⁸⁾

説教では、一貫した論理は、時には邪魔にさえなる。

「私はキケロと共に無限なものに憧れる」と日記に書いたエマスは、『自然論』では、はじめに宇宙を持ち

出して読者に疑問を投げかけ、もっとも得意とするところから討論をはじめた。

Why should not we also enjoy an original relation to the universe?

彼は単純な質問の形式を用いて、日常会話的に平易な宇宙論を述べ、多くの例や比較をあげて説明した。それから端的に結論を示して、読者を感動と興奮の渦にまきこんで説得しようとした。このプロセスにおける熱弁が前にふれたペインの文章を想起させるものである。改訂版（一八四九）では、初版（一八三六）のプロティノスの言葉を借用したエピソードを自作のものに入れかえた以外は句読点と修飾語句をわずかに変更したというような改訂が見られるにすぎないが、本稿の引用はより文勢があると思われる初版によった。⁽¹⁰⁾

二

『自然論』 序章

序章は『自然論』の要約であり、もっとも革新的な部分である。冒頭の部分は、広義に見れば『アメリカの学者』と同じく、アメリカの知的独立宣言文だと言える。彼が言う父祖とはヨーロッパ人のことであり、この部分はヨーロッパ文化からの解放を歌ったものだからである。狭義に見れば、独立心に溢れる人びとに、神と自然と人間の間の従来を捨てて、新しい独自の関係をもつように呼びかけ、当時の思想を批判して、形式主義に毒されない視点が必要ではないかと問題を提起したものである。これは父祖のピューリタンと同程度の厳しさと激しさをもって生きよという行動への招待である。さらに、自然のなかには、あらゆる現象を説明する真理が含まれているから、神によって創造されたこの世界は完全であるということを信頼すべきだと主張した。

Our age is retrospective. It builds the sepulchres of the fathers. It writes biographies, histories, and criticism. The foregoing generations beheld God and nature face to face; we, through their eyes.... Why should not we have a poetry and philosophy of insight and not of tradition, and a religion by revelation to us, and not the history of theirs?

ヘーゲルは直接に真理を把握することの必要性和思索することの重要性とを述べ、もつとも抽象的な真理が、もつとも実際のなものではないかと問いかけた。

We are now so far from the road to truth, that religious teachers dispute and hate each other, and speculative men are esteemed unsound and frivolous. But to a sound judgment, the most abstract truth is the most practical.

これはヘーゲルが重要だと主張する「思索の人」への非難にたいする彼の反撥である。彼は論の展開に先立って自然をいぎのように定義した。彼の自然は被造物全体をあらわすと同時に、人間にたいする自然という二重構造をもつものである。

Philosophically considered, the universe is composed of Nature and the Soul. Strictly speaking, therefore, all that is separate from us, all which Philosophy distinguishes as the NOT ME, that is, both nature and art, all other men and my own body, must be ranked under this name, NATURE. In enumerating the values of nature and casting up their sum, I shall use the word in both senses;

—in its common and in its philosophical import. In inquiries so general as our present one, the inaccuracy is not material; no confusion of thought will occur. *Nature*, in the common sense, refers to essences unchanged by man; space, the air, the river, the leaf. *Art* is applied to the mixture of his will with the same things, as in a house, a canal, a statue, a picture. But his operations taken together are so insignificant, a little chipping, baking, patching, and washing, that in an impression so grand as that of the world on the human mind, they do not vary the result.

このように、自然の定義は不正確でもかまわないと言って、説明をつけ加えているが、それは、結局、自然を消し去るという意図をもっていたからにはかならない。そのためには、かえって、曖昧にしておいて論を進めるほうが好都合であるに違いない。また、過去のさまざまな関係を一掃した後で、新しい独自の関係を結び、自身への礼拝、法則、仕事を創始せよと彼は言うのである。宗教改革には、とくに熱狂的な行動力と精神力とが必要である。しかし、ヘーゲルがアーノルド (Matthew Arnold) の言うように、悩む人びとの助言者、友人であるにとどまったのは、主観に映る自然をすべて賛美するという彼の楽天性が主要な原因になっているからである。序章解読の鍵はつぎの文章である。

Our age is retrospective... In inquiries so general as our present one, the inaccuracy is not material; no confusion of thought will occur.

『自然論』 第一章 自然

自然は眼に見えるが近づけないから完璧なのだと語って、エマソンは自然の奥に実在する霊の象徴として星を例にあげた。

The stars awaken a certain reverence, because though always present, they are always inaccessible; but all natural objects make a kindred impression, when the mind is open to their influence. . . . When we speak of nature in this manner, we have a distinct but most poetical sense in the mind. We mean the integrity of impression made by manifold natural objects. It is this which distinguishes the stick of timber of the wood-cutter, from the tree of the poet.

彼が自然との融合には「詩人の眼」、すなわち、「透明な眼球」が必要だと言うときには、ただ詩的感觉だけではなく、生来の神秘的傾向が強うかがわれるのを見落してはならない。エマソンは、青年時代には、とくに叔母ムーディ(Mary Moody Emerson)などから強い神秘主義の影響をうけている⁽¹⁾。ついであるが、トランセンデンタル・クラブの会員であり、エマソンの親しい友人であったJames Veryが多くの人びとから狂人だと思われたほど異常な神秘主義者であったということはよく知られている。エマソンに見られる神秘的傾向は比較的軽視されているが、これは、より重視されなければならない。自然と融合し、無心になって、理性と信仰とを回復するとき、神の一部になる歓喜が得られるという神秘的感覚をエマソンは強調している。人間が精神的本性を発見するためのエマソンの方法がこれである。

In the woods, is perpetual youth. Within these plantations of God, a decorum and sanctity reign, a perennial festival is dressed, and the guest sees not how he should tire of them in a thousand years. In the woods, we return to reason and faith. There I feel that nothing can befall me in life,—no disgrace, no calamity, (leaving me my eyes), which nature cannot repair. Standing on the bare ground,—my head bathed by the blithe air, and uplifted into infinite space,—all mean egotism vanishes. I become a transparent eye-ball. I am nothing. I see all. The currents of the Universal Being circulate through me; I am part or particle of God.

この歡喜を生み出す力は自然自身がもっているものではなくて、自然と人間との融合のなかにあると彼は言つが、それは前述したように、やがて自然を消し去るための伏線である。彼にとつて、自然は固有の存在価値をもつてはならなかつたのである。このことを多くの日常生活的な例をあげながら、以下の各章においてハムズンは示している。

The greatest delight which the fields and woods minister, is the suggestion of an occult relation between man and the vegetable. I am not alone and unacknowledged. They nod to me and I to them. The waving of the boughs in the storm, is new to me and old. It takes me by surprise, and yet is not unknown. Its effect is like that of a higher thought or a better emotion coming over me, when I deemed I was thinking justly or doing right.

Yet it is certain that the power to produce this delight, does not reside in nature, but in man,

or in a harmony of both. It is necessary to use these pleasures with great temperance. For, nature is not always tricked in holiday attire, but the same scene which yesterday breathed perfume and glittered as for the frolic of the nymphs, is overspread with melancholy today. Nature always wears the colors of the spirit. To a man laboring under calamity, the heat of his own fire hath sadness in it. Then, there is a kind of contempt of the landscape felt by him who has just lost by death a dear friend. The sky is less grand as it shuts down over less worth in the population.

自然は精神の投影でなければならない。くりかえすが、現代的視点から見れば、無関係である自然と人間とを融合させて一体感をもたせるということは、エマスの神秘的傾向であり、自然を消し去るための彼にとっては抵抗感のない操作である。本章解説の鍵はつぎの文章である。

Standing on the bare ground,...all mean egotism vanishes. I become a transparent eye-ball. I am nothing. I see all. The currents of the Universal Being circulate through me; I am part or particle of God....Nature always wears the colors of the spirit.

『自然論』 第二章 実益

『自然論』のなかで、もっとも現実的であり、もっとも短い章である。本章でエマスは、誰にでも理解できる自然の第一の効用である人間にたいする自然の奉仕、すなわち、人間感覚に与えられる実益について語った。産業主義の成果と社会体制との奉仕が自然の大きな実益だと彼は言う。否定するためには、かえって、産業主義

のもたらす実益を強調するほうが効果的である。実益は自然から見れば奉仕かも知れないが、人間から言えば自然の征服ということになるであろう。本章では、エマスは自然にたいして、一応、素朴な反応を示している。この反応を見るかぎりでは、自然にたいして唯心論の立場をとり、自然を偉大な幻影だと見なしたエマスは当時のアメリカの産業発展による物質主義に反対のあまり、物質にたいする精神の優位を強調したのではないかと疑わせるほどである。しかし、それはユニテリアンの環境に育ち、自分自身もユニテリアン派の牧師であったエマスは、自分では、たとえ否定しても、当時ハーバードをはじめとしてニュー・イングランドで流行していたロック哲学の無意識的影響下にあったからであると言えよう。本章は『自然論』のなかではもっともロック的な部分である。

Under the general name of Commodity, I rank all those advantages which our senses owe to nature. This, of course, is a benefit which is temporary and mediate, not ultimate, like its service to the soul. Yet although low, it is perfect in its kind, and is the only use of nature which all men apprehend.

このように、感覚に訴える自然の奉仕は、完全ではあるが、一時的、間接的であり、自然の効用のなかですべての人が理解できる唯一のものだとエマスは言い、一時的、間接的ではなく、窮極的な意味をもつ効用とはなにかということについて論じはじめる。

Nature, in its ministry to man, is not only the material, but is also the process and the result.

All the parts incessantly work into each other's hands for the profit of man. The wind sows the seed; the sun evaporates the sea; the wind blows the vapor to the field; the ice, on the other side of the planet, condenses rain on this; the rain feeds the plant; the plant feeds the animal; and thus the endless circulations of the divine charity nourish man.

感覚に訴える自然は人間を育てるために存在するのだという好都合な解釈がなされているが、ここにはかきりない夢をもつ当時の浪漫的なアメリカ社会の雰囲気がかがわれる。しかし、彼がつねに精神との関係においてのみ自然を考えているのは、自然と精神という二つのものを精神に統一しようという意図があったからにほかならない。本章解読の鍵はつぎの文章である。

But there is no need of specifying particulars in this class of use. The catalogue is endless, and the examples so obvious, that I shall leave them to the reader's reflection, with the general remark, that this mercenary benefit is one which has respect to a farther good.

『自然論』 第三章 美

自然の第二の効用である美は、最高の芸術家である眼の造形力によって得られる歎喜であると言って、彼は美を三分して説明した。第一は悟性によって理解できる自然の効用、すなわち、自然の形態美である。

The influence of the forms and actions in nature, is so needful to man, that, in its lowest func-

tions, it seems to lie on the confines of commodity and beauty.... But this beauty of Nature which is seen and felt as beauty, is the least part. The shows of day, the dewy morning, the rainbow, mountains, orchards in blossom, stars, moonlight, shadows in still water, and the like, if too eagerly hunted, become shows merely, and mock us with their unreality. Go out of the house to see the moon, and 't is mere tinsel; it will not please as when its light shines upon your necessary journey.

感覚によつてとらえ得る明白なものはとるにたりない部分であるとして、より高尚で靈的な部分、すなわち明白でない暗い部分へと彼は論を進めてゆく。しかし、説教の論理を用いているために説得力が弱いが、雄弁によつて、彼はある程度までそれを補足している。

The presence of a higher, namely, of the spiritual element is essential to its perfection. The high and divine beauty which can be loved without effeminacy, is that which is found in combination with the human will, and never separate. Beauty is the mark God sets upon virtue. Every natural action is graceful. Every heroic act is also decent, and causes the place and the bystanders to shine. We are taught by great actions that the universe is the property of every individual in it. Every rational creature has all nature for his dowry and estate. It is his, if he will. He may divest himself of it; he may creep into a corner, and abdicate his kingdom, as most men do, but he is entitled to the world by his constitution. In proportion to the energy of his thought and will, he takes up the world into himself.

第一のもものよりも神聖で、理性によって理解できる意志と結びついた美が第二のものである。たとえば、偉大な行為とその背景とが結びついているときの美で、偉大な行為には無意識的に自然美が入っている。すなわち、徳にたいして与えられる美である。

第三は思考にたいする美、すなわち、知性の対象になる美である。知性はものの絶対的秩序を神の心の内部に感情をまじえないで探ることができるとエマソンは言う。そして、神聖なものは永遠不滅だと語る。

Nothing divine dies. All good is eternally reproductive. The beauty of nature reforms itself in the mind, and not for barren contemplation, but for new creation.

エマソンの意図はいよいよ明白になってゆく。自然美を超越して、感覚的な部分から霊的な部分へ、明白な知覚から微妙な直観へと彼は論を急速に展開しようとする。

But beauty in nature is not ultimate. It is the herald of inward and eternal beauty, and is not alone a solid and satisfactory good. It must therefore stand as a part and not as yet the last or highest expression of the final cause of Nature.

自然美は宇宙をあらわす一表現ではあるが、窮極的な目的ではなく、内面的で永遠の最高美を予告する使者にすぎない。ここからエマソンは一種の幻想の世界へ入ってゆく。超自然への憧憬が、いわば麻薬の役割を演じている。内面的で永遠の最高美も、異常なものへ吸いこまれてゆく心（宗教心がその代表的なものである）をもたなければその人の眼には映らない。本章の終りの部分は、宗教になる直前の芸術についてエマソンが語っている

部分である。しかし、エマースの論法を見ると、形態美からの論の回転法として陶酔的な雄弁に頼りすぎている
きらいがある。彼は全体性というものに著目して、孤立しているものは美ではないという一への指向を述べてい
る。すなわち、すべてのものは窮極的には霊へ向かって集中されているとエマースは言うのである。

The production of a work of art throws a light upon the mystery of humanity. A work of art
is an abstract or epitome of the world. It is the result or expression of nature, in miniature. For
although the works of nature are innumerable and all different, the result or the expression of
them all is similar and single. Nature is a sea of forms radically alike and even unique.

本章解説の鍵はつぎの文章である。

But beauty in nature is not ultimate.

『自然論』 第四章 言語

自然の効用の一つである言語は思考伝達の媒体としての自然を位置つけたものである。すなわち、言語は自然
と精神とを結ぶ記号だとエマースは言うのである。

1. Words are signs of natural facts.
2. Particular natural facts are symbols of particular spiritual facts.
3. Nature is the symbol of spirit,

ここにおける主題のならべられている順序を見ると、個別的、具体的な事実から、より高次元の、より普遍的な精神にたいする自然の象徴性を証明しようとしている。自然の事実と言語とは相関関係をもち、言語はすべて自然の事実に類似している。人間には、このことを感じとる能力があるから、この能力で、自然と自分の根源的な意味を探らなければならないと彼は言う。これはスウェーデンボルグの対応の思想に影響されたものである。

Every natural fact is a symbol of some spiritual fact. Every appearance in nature corresponds to some state of the mind, and that state of the mind can only be described by presenting that natural appearance as its picture.

この考え方が帰納的に押し進められて、つぎのような発言になる。

The world is emblematic. Parts of speech are metaphors because the whole of nature is a metaphor of the human mind. The laws of moral nature answer to those of matter as face to face in a glass.

自然と霊との間には根本的な対応関係があり、この関係は光線のように全存在の中心に位置する人間に向かって集中しているとエマースンは説明して、彼の論を人間と霊の方向へ向ける準備をととのえた。

This relation between the mind and matter is not fancied by some poet, but stands in the will of God, and so is free to be known by all men. It appears to men, or it does not appear. When in

fortunate hours we ponder this miracle, the wise man doubts, if, at all other times, he is not blind and deaf; —“Can these things be,

And overcome us like a summer's cloud,

Without our special wonder?”

for the universe becomes transparent, and the light of higher laws than its own, shines through it. It is the standing problem which has exercised the wonder and the study of every fine genius since the world began; from the era of the Egyptians and the Brahmins, to that of Pythagoras, of Plato, of Bacon, of Leibnitz, of Swedenborg. There sits the Sphinx at the road-side, and from age to age, as each prophet comes by, he tries his fortune at reading her riddle. There seems to be a necessity in spirit to manifest itself in material forms.

物は明らかに精神の影として従属的な関係をもち、エマースは言う。彼がいついかに明白なものを拒否してきたのは、世界を精神の象徴に変えるための手段であつたといふことが、ここですらに明白になった。物の輪郭が明確であるほど、そのなかへの精神の侵入は困難である。エマースは一貫して、明白な具体性を排除する努力を払ってきた。本章ではアナロジーにみられるエマースのイメージの獨創性が光っている。本章解読の鍵はつぎの文章である。

Every word which is used to express a moral or intellectual fact, if traced to its root, is found to be borrowed from some material appearance... Every object rightly seen unlocks a new faculty

of the soul.

『自然論』 第五章 訓練

最後にあげられた自然の効用は訓練である。自然はさまざまな形態をとって悟性と理性とを訓練して真理へ導こうとする。

第一に、自然は理知がとらえる真理によって悟性を訓練し、同時に、人間の推理力を発達させるための材料になるとエマースンは説くが、もし人間が傲慢だと、この材料を恣意的に用いて、自然の主観的再編成を行なう危険性があると彼は警告する。

The understanding adds, divides, combines, measures, and finds everlasting nutriment and room for its activity in this worthy scene. Meantime, Reason transfers all these lessons into its own world of thought, by perceiving the analogy that marries Matter and Mind... Our dealing with sensible objects is a constant exercise in the necessary lessons of difference, of likeness, of order, of being and seeming, of progressive arrangement; of ascent from particular to general; of combination to one end of manifold forces.

退屈な反復訓練は実行の必要性を告げているのだとエマースンは述べて、行動重視の態度を見せる。

The exercise of the Will or the lesson of power is taught in every event. . . Nature is thorough-

ly mediate. It is made to serve. It receives the dominion of man as meekly as the ass on which the Saviour rode. It offers all its kingdoms to man as the raw material which he may mould into what is useful. Man is never weary of working it up. ...More and more, with every thought, does his kingdom stretch over things, until the world becomes, at last, only a realized will,—the double of the man.

第二に、実益という低次元の効用を理解する感覚や悟性によるのではなくて、高次元の理解力をもつ直観と理性とによるならば、最終的には精神の根源である普遍的な量にまで到達できるとヘーゲルは言う。こうで彼は自然を宗教の領域につれていって成功した。

Sensible objects conform to the premonitions of Reason and reflect the conscience. All things are moral; and in their boundless changes have an unceasing reference to spiritual nature. Therefore is nature glorious with form, color, and motion, that every globe in the remotest heaven; every chemical change from the rudest crystal up to the laws of life; every change of vegetation from the first principle of growth in the eye of a leaf, to the tropical forest and antediluvian coal-mine; every animal function from the sponge up to Hercules, shall hint or thunder to man the laws of right and wrong; and echo the Ten Commandments. Therefore is nature always the ally of Religion; lends all her pomp and riches to the religious sentiment. Prophet and priest, David, Isaiah, Jesus, have drawn deeply from this source.

人間にとって自然は訓練の場であり、自然が与える道徳的影響こそ自然が例証する真理の合計だとエマソンは述べる。

It has already been illustrated, in treating of the significance of material things, that every natural process is but a version of a moral sentence. The moral law lies at the centre of nature and radiates to the circumference. It is the pith and marrow of every substance, every relation, and every process. All things with which we deal, preach to us.

しかし、これにつづいて農場の話为例にあげて、農場のすべては神聖な象徴だと断定し、すべては善で、悪が侵入する余地はないと説いて、認識と現実との間の関係を道徳的法則のあらわれだと述べた。しかし、当時の南部アメリカの大農場における奴隷労働などを考えると、これはエマソンの自然観が楽天的な主観にのみよるものだという欠点を暴露したものと云わざるを得ない。

自然は、感覚でとらえ得る物によって悟性を訓練し、すべての事実を人間のものにするが、実は霊の本性に深い関係をもち、きわめて倫理的であり、多様なものが共有する統一性とか、個々のものが指向する全体性とかを教えてくれるのだというエマソンの論理は、陶酔の間に突如として、あまりにも見事に断層を跳躍した。

Each creature is only a modification of the other; the likeness in them is more than the difference, and their radical law is one and the same. Hence it is, that a rule of one art, or a law of one organization, holds true throughout nature. So intimate is this Unity, that, it is easily seen,

it lies under the undermost garment of nature, and betrays its source in universal Spirit. For, it pervades Thought also. Every universal truth which we express in words, implies or supposes every other truth. *Omne verum vero consonat*. It is like a great circle on a sphere, comprising all possible circles; which, however, may be drawn, and comprise it, in like manner. Every such truth is the absolute Ens seen from one side. But it has innumerable sides.

やうして『自然論』前半の諸論やその意味はつたがた。

The same central Unity is still more conspicuous in actions. Words are finite organs of the infinite mind. They cannot cover the dimensions of what is in truth. They break, chop, and impoverish it. An action is the perfection and publication of thought. A right action seems to fill the eye, and to be related to all nature.

Words and actions are not the attributes of mute and brute nature. They introduce us to that singular form which predominates over all other forms. This is the human. All other organizations appear to be degradations of the human form. When this organization appears among so many that surround it, the spirit prefers it to all others.

ハイムンが、このやうにして、窮極的な根源である霊に現はれるもの。本章解説の鍵はこの文章である。

The moral law lies at the centre of nature and radiates to the circumference. It is the pith and

marrow of every substance, every relation, and every process. All things with which we deal, preach to us.

『自然論』 第六章 唯心論

本章は『自然論』の中心に位置するもので、自然は外部に実在しているのかどうかという問題を回避するヘームスの考え方が読みとれる。自然を注目することから多くのものを得るのだが、霊が必然的に実在し、自然よりも優位を占め、宗教、倫理、科学などの手段によって、人間は霊のもとに到達できると彼は説いている。すなわち、本章では、ヘームスの論点は完全に自然から精神へ移っている。本章の冒頭で宇宙の窮極的根源である霊についての解答を彼は疑問形で提出した。

THUS is the unspeakable but intelligible and practicable meaning of the world conveyed to man, the immortal pupil, in every object of sense. To this one end of Discipline, all parts of nature conspire.

A noble doubt perpetually suggests itself, whether this end be not the Final Cause of the Universe; and whether nature outwardly exists. It is a sufficient account of that Appearance we call the World, that God will teach a human mind, and so makes it the receiver of a certain number of congruent sensations, which we call sun and moon, man and woman, house and trade. In my utter impotence to test the authenticity of the report of my senses, to know whether the impressions

they make on me correspond with outlying objects, what difference does it make, whether Orion is up there in heaven, or some god paints the image in the firmament of the soul?

こつて自然の法則は不変であることを認めたのである。そして、實在の問題は未解決のままだということわりながらも、實在であろうと實在でなかつたやうと有用ならばどうでもいいというプラグマティックな考え方を示して、エマソンの本質である超論理の主観的解答を提示した。

Whether nature enjoy a substantial existence without, or is only in the apocalypse of the mind, it is alike useful and alike venerable to me. Be it what it may, it is ideal to me, so long as I cannot try the accuracy of my senses.... God never jests with us, and will not compromise the end of nature, by permitting any inconsequence in its procession. Any distrust of the permanence of laws, would paralyze the faculties of man. Their permanence is sacredly respected, and his faith therein is perfect. The wheels and springs of man are all set to the hypothesis of the permanence of nature.

しかも、自然の法則が不変でも自然は現象にすぎず、靈こそが實在であるのは、理性の眼で見ると、どれほど堅固なものでも、その輪郭がぼやけてくることから理解できるという独断をエマソンは、憶面もなく、雄弁にくだしたのである。すなわち、自分の信仰を、論理を無視して主張したのである。すなわち、エマソンは絶対に飛びこせない断層を飛びこえたという幻想をもったのである。つづいて、彼は五項目に分けて、説教者の態度で、

これを説明して読者を納得させようとした。

To the senses and the unrenewed understanding, belongs a sort of instinctive belief in the absolute existence of nature. In their view, man and nature are indissolubly joined. Things are ultimates, and they never look beyond their sphere. The presence of Reason mars this faith. The first effort of thought tends to relax this despotism of the senses, which binds us to nature as if we were a part of it, and shows us nature aloof, and, as it were, afloat. If the Reason be stimulated to more earnest vision, outlines and surfaces become transparent, and are no longer seen; causes and spirits are seen through them. The best, the happiest moments of life, are these delicious awakenings of the higher powers, and the reverential withdrawing of nature before its God.

第一に、自分が自然と遠く隔たっていることを認識することによって、見る者として自分が宇宙の中心になっていることを暗示する。機械的な変化を視点に与えると、物は現実性を失って仮象になり、見られるものと見るものとの間の相違が示され、これによって畏敬の念と混合した快感が生まれるのだと彼は日常生活的な例をあげて説明した。

Nature is made to conspire with spirit to emancipate us. In these cases, by mechanical means, is suggested the difference between the observer and the spectacle,—between man and nature. Hence arises a pleasure mixed with awe; I may say, a low degree of the sublime is felt from the

fact, probably, that man is hereby apprized, that, whilst the world is a spectacle, something in himself is stable.

第二に、一般の人びとは想念を物に一致させるが、詩人は物を想念に一致させるから、物の理念上の類似を認識できるので述べて、詩人は高次元の快感を味わうことができると説いた。ここにヘーゲルの詩人論がうかがえる。

Possessed himself by a heroic passion, he (the poet) uses matter as symbols of it. The sensual man conforms thoughts to things; the poet conforms things to his thoughts. The one esteems nature as rooted and fast; the other, as fluid, and impresses his being thereon. To him, the refractory world is ductile and flexible; he invests dust and stones with humanity, and makes them the words of the Reason. The imagination may be defined to be, the use which the Reason makes of the material world.

第三に、詩人と哲人との間には、美を主要目的にするか、真理を主要目的にするかという相違があるだけで、哲人も詩人と同様に現象の法則を知ることによって現象を予言することができる。ヘーゲルは言う。さらに、自説を進めながら物理学や天文学など自然科学にもふれる。

The true philosopher and the true poet are one, and a beauty, which is truth, and a truth, which is beauty, is the aim of both.... Thus even in physics, the material is ever degraded before the

spiritual. The astronomer, the geometer, rely on their irrefragable analysis, and disdain the results of observation. The sublime remark of Euler on his law of arches, "This will be found contrary to all experience, yet is true;" had already transferred nature into the mind, and left matter like an outcast corpse.

第四に、精神科学は物質の实在をつねに疑いつづけ、觀念に注意を集中するとエマソンは言う。觀念の世界にまで高められると、神聖な本性にふれて神性をもつことができ、觀念の前では外部の事実は夢幻にすぎないように感じられると彼は説く。これは觀想の世界である。

It fastens the attention upon immortal necessary uncreated natures, that is, upon Ideas; and in their beautiful and majestic presence, we feel that our outward being is a dream and a shade.... We apprehend the absolute. As it were, for the first time, *we exist*. We become immortal, for we learn that time and space are relations of matter; that, with a perception of truth, or a virtuous will, they have no affinity.

第五に、宗教と倫理とは靈に依存していて、自然を輕蔑すると説き、教養を高めると自然は現象にすぎず、實在ではなく、靈だけが實在だということがわかると結論する。しかし、この考え方は自然にたいする敬意から出發したものではなく、人間にたいする自然の位置を知ることが必要だという考え方から出發したものだと言ふ。これはしばしば見られる矛盾した弁解の一つである。しかし、これら矛盾や弁解にとらわれるとエマ

エマスの全体像を見逃す危険性がある。物の輪郭と表面が透明になるから霊が姿を見せるとするのは、要するに、精神の眼に見えるものは、ただ精神自体だということに帰着する。本章解読の鍵はつぎの文章である。

Idealism sees the world in God.

『自然論』 第七章 霊

自然のもっとも立派な任務は神の顕現として存在していることだとエマスは言う。換言すれば、自然とは霊と人間との間に介在するものだということである。

And all the uses of nature admit of being summed in one, which yields the activity of man an infinite scope. Through all its kingdoms, to the suburbs and outskirts of things, it is faithful to the cause whence it had its origin. It always speaks of Spirit. It suggests the absolute. It is a perpetual effect. It is a great shadow pointing always to the sun behind us.

..That essence refuses to be recorded in propositions, but when man has worshipped him intellectually, the noblest ministry of nature is to stand as the apparition of God. It is the great organ through which the universal spirit speaks to the individual, and strives to lead back the individual to it.

霊を説明するためにエマスは自然を最終的には消し去るのである。精神にたいする自然の質問に彼はつぎの

いろいろな回答を与えている。

Three problems are put by nature to the mind; What is matter? Whence is it? and Where to? The first of these questions only, the ideal theory answers. Idealism saith: matter is a phenomenon, not a substance. Idealism acquaints us with the total disparity between the evidence of our own being, and the evidence of the world's being. The one is perfect; the other, incapable of any assurance; the mind is a part of the nature of things; the world is a divine dream, from which we may presently awake to the glories and certainties of day. Idealism is a hypothesis to account for nature by other principles than those of carpentry and chemistry. Yet, if it only deny the existence of matter, it does not satisfy the demands of the spirit. It leaves God out of me. It leaves me in the splendid labyrinth of my perceptions, to wander without end.

エマソンは霊が世界の本質で、自然は人間と霊とを結ぶ媒介者にすぎないと断定した。媒介者から人間への自発的な行動は絶対にあり得ず、人間が直感によって、媒介者である自然をとらえることができなければ神の啓示を受けることはできないと彼は説明した。本章ではエマソンは情熱的な詩人の態度で語っているので、本章は一種の宗教詩になっている。本章解説の鍵はつぎの文章である。

The world proceeds from the same spirit as the body of man. It is a remoter and inferior incarnation of God, a projection of God in the unconscious. But it differs from the body in one im-

portant respect. It is not, like that, now subjected to the human will. Its serene order is inviolable by us. It is therefore, to us, the present expositor of the divine mind. It is fixed point whereby we may measure our departure. As we degenerate, the contrast between us and our house is more evident. We are as much strangers in nature, as we are aliens from God. We do not understand the notes of birds.

『自然論』 第八章 展望

世界の法則を知るためには、理性なしに細部を研究しても無意味である。自然科学者は自然と人間の融合の必要を知らなければならない。自然科学者が認識できない真理を認識するのが詩人である。一般に、人間は自然にたいして悟性だけを用いる結果、自然の真実も人間の真実も見逃している。自然の法則を知るためには、精神の力によって、霊の世界へと自分を押しあげることが必要である。もし自然の法則を理解できれば、自分というものも理解できる。自然を見るとときに、もし荒廃や空虚が眼に映るとすれば、それらが自分自身のなかに内在しているからであるというのがヘーゲルの考え方である。世界を新しい眼で直接に見れば、真理が自然を通してわかり、自分が宇宙の中心であり、かぎりない可能性をもっていることが発見されると彼は説くのである。

In inquiries respecting the laws of the world and the frame of things, the highest reason is always the truest. That which seems faintly possible—it is so refined, is often faint and dim because it is deepest seated in the mind among the eternal verities. Empirical science is apt to cloud

the sight, and, by the very knowledge of functions and processes, to bereave the student of the manly contemplation of the whole. The savant becomes unpoetic. But the best read naturalist who lends an entire and devout attention to truth, will see that there remains much to learn of his relation to the world, and that it is not to be learned by any addition or subtraction or other comparison of known quantities, but is arrived at by untaught sallies of the spirit, by a continual self-recovery, and by entire humility. He will perceive that there are far more excellent qualities in the student than preciseness and infallibility; that a guess is often more fruitful than an indisputable affirmation, and that a dream may let us deeper into the secret of nature than a hundred concerted experiments.

Nor has science sufficient humanity, so long as the naturalist overlooks that wonderful congruity which subsists between man and the world; of which he is lord, not because he is the most subtile inhabitant, but because he is its head and heart, and finds something of himself in every great and small thing, in every mountain stratum, in every new law of color, fact of astronomy, or atmospheric influence which observation or analysis lays open.

The perception of this class of truths makes the eternal attraction which draws man to science, but the end is lost sight of in attention to the means. In view of this half-sight of science, we accept the sentence of Plato, that, "poetry comes nearer to vital truth than history."

霊は実在としてヘーゲルの頭のなかに存在していた。彼は産業主義の力が強い当時、自然と人間との間の関係と、そのとらえ方を工夫して、その時代の思考の停止状態を打破しようとした。彼のこの工夫の方向は具体的な自然の奥にある抽象的なものへ向かっていた。

At present, man applies to nature but half his force. He works on the world with his understanding alone. He lives in it and masters it by a penny-wisdom;... The problem of restoring to the world original and eternal beauty is solved by the redemption of the soul... Whilst the abstract question occupies your intellect, nature brings it in the concrete to be solved by your hands. It were a wise inquiry for the closet, to compare, point by point, especially at remarkable crises in life, our daily history, with the rise and progress of ideas in the mind.

自然科学者の使命は正確さの追求ではなく、理性によって真理を感じとることである。しかし、産業主義に毒されている人間は、物の奴隷になっている。もし、自然にたいして、悟性だけで働きかけることをやめて、精神に生活を従わせれば、壮大な可能性が与えられるであろうと書いて、ヘーゲルは唯心論という仮説の上に楽天的に薔薇色の未来を托したのである。本章においても、ヘーゲルは詩人として語っているが、前章よりも説教調がより強く感じられる。本章解説の鍵はつぎの文章である。

So shall we come to look at the world with new eyes. It shall answer the endless inquiry of the intellect,—What is truth? and of the affections,—What is good? by yielding itself passive to the

educated Will. Then shall come to pass what my poet said; 'Nature is not fixed but fluid. Spirit alters, moulds, makes it. The immobility or bruteness of nature, is the absence of spirit; to pure spirit, it is fluid, it is volatile, it is obedient. Every spirit builds itself a house; and beyond its house, a world; and beyond its world, a heaven. Know then, that the world exists for you. For you is the phenomenon perfect. What we are, that only can we see. All that Adam had, all that Caesar could, you have and can do... Build, therefore, your own world. As fast as you conform your life to the pure idea in your mind, that will unfold its great proportions. A correspondent revolution in things will attend the influx of the spirit.

三

『自然論』において、感覚的経験よりも理性や道徳による直観的認識を高く評価したエマスの思想的立場を理解することは困難ではない。たとえば、普遍的実在として神を位置づける彼の立場は一貫している。この神にたいするキリスト、教会、人間、自然の間の関係という問題に関しては、彼はきわめて革新的である。

『自然論』のなかで、エマスはいかにして自然が人間に用いられるかという問題を効用と呼び、その輪郭と色彩と配列と運動とに認められる調和を美と呼び、それらが意味し、象徴するものを言語と呼び、それらを識別整理することを訓練と呼んだ。この考え方は明らかにアリストテレスの影響によるものである。たとえば、*materials, efficiens, formalis, finalis* を平易に解釈したものだと言える⁽²⁾。「唯心論」と「霊」の二章において、彼はもっともエマスらしい『自然論』の要点を述べた。また、「展望」の章において、直観による展望は

感覚による展望よりも有力であることを例証しながら主張した。

エマスの自然にたいする態度は物と感覚による経験の価値とを認めず、自分の自然観を正当化する手段として彼は観念論を使用し、彼の自然は説教に必要な比喩を提供する石切場にすぎないというような意見は明快ではあるが、単純化しすぎているように思われる。南北戦争で衝撃をうけるまでのエマスの観念論を手段として用いられたものとは簡単には言い切れまい。急進的観念論の説教だと言ってもよい『自然論』を、キリストの代役として自然を使用し、仮象である自然の奥に実在する神と人間とを結ぼうとした試みだと要約することは許されるであろうが、『自然論』は複雑だからこれは危険な説明だとも言える。この処女作を完成するまでに、エマスはプラトニズム、ピュリタニズム、ユニテリアニズム、クエイカリズム、ネオプラトニズム、ドイツ観念論哲学、スウェーデンボルグやコールリッジやカーライルやワーズワースなどの思想から自分が正しいと思うものを選び、それに彼自身の神秘的直観などを織りまぜて、実際には論理の飛躍や矛盾が多いが、つとめて論理的に新しいものを創造しようとしたのがアメリカ超絶主義の基礎になった『自然論』である。このなかでエマスは上記のどの思想よりも物質世界を観念論的に解釈してみせたと言える。そして、とくに倫理道徳を重視したのは当時の産業主義社会にたいする彼の批判のあらわれであり、革新的なところは腐敗した宗教界にたいする彼の反撥である。また、この作品が煽動的であるというのは、彼の雄弁が説教と講演によって鍛えられたものだからである。さらに、『自然論』には若さのための情熱が溢れ、彼自身の未熟さゆえに読者が抱く共鳴、反感、興奮などが秘められている。そのために、『自然論』は当時の人びとの一部から軽蔑をうけ、無視され、また、一部からはエマス自身の期待以上の賞賛を浴びたのである。

エマスは『自然論』で、人間は自然と一体になることにより神人合一の忘我の境地に到達する可能性がある

と語った。現象である自然は、霊と人間精神との橋渡しになっているので、その姿を消し去られるまでは絶対に必要なものであった。しかし、この自然を媒介者にするために不可欠なものとしてエマソンは詩人の眼を要求した。それゆえに、詩人でなければ、自然は媒介者にはならず、姿を消す必要もなく、人間と神との直接交渉はありえないということになる。

There is a property in the horizon which no man has but he whose eye can integrate all the parts.

ここにエマソンの芸術観がうかがわれる。彼によれば、芸術作品とは世界の要約であり、縮少された自然の表現であり、世界は美の欲求を満足させるために存在しているというのである。この第二の眼である詩人の眼によって獲得されたものは、物と一体化した有機的特質をもつ言語によってのみ真理として伝えられるものである。自然が精神に与える訓練をうけることによって、人間は洞察力を獲得し、崇高な存在に変化する。この孤高の霊的存在としての人間をエマソンは要求した。そして、霊は自然に内在し、風景は霊の姿として人間の眼にうつる。霊は自然より優位にあり、この霊と合一できるものは第二の眼をもつ詩人だけである。そして、エマソンは全人類に向かって詩人になれと言って、特殊から一般へと主題の解決を拡大した。このことは注目し価値があることである。また、より抽象的な真理の追求こそ、より高次元の精神の慰安だと彼は説いた。

エマソンによれば、自然の調和と秩序から神意を知ることができるというのであるから、窮極的には、宇宙の精神と人間の精神とは同一だということに帰着する。

Whilst the abstract question occupies your intellect, nature brings it in the concrete to be solved by your hands.

觀念と現實との間の矛盾をそのままにして、両者を一つの体系にまとめようと樂天的にエマースは計画した。現代の視点から見れば、夢幻の世界をエマースは『自然論』のなかで画いてみせたのであるが、彼の語る調子が煽動家の調子であつたから、これを現實そのものだと思はれた。しかし、夢であるからこそ、現實生活への示唆が含まれていると言える。『自然論』を全体的に見れば、ピューリタンの道徳の上に自分の思想を体系的にうち立てようと努力したものであるが、結果は神と自然と人間の間の調和に陶醉した一人の詩人の散文詩になっている。しかも、彼が神秘的説教家であるために論理的ではなく、『自然論』は夢のような説教になつてしまつてゐる。

As when the summer comes from the south the snow-banks melt and the face of the earth becomes green before it, so shall the advancing spirit create its ornaments along its path, and carry with it the beauty it visits and the song which enchants it; it shall draw beautiful faces, warm hearts, wise discourse, and heroic acts, around its way, until evil is no more seen. The kingdom of man over nature, which cometh not with observation,—a dominion such as now is beyond his dream of God,—he shall enter without more wonder than the blind man feels who is gradually restored to perfect sight.

結論のなかで、『自然論』は現実的価値、精神的価値、悪の性格、過去と未来などの日常的な諸問題についてのエマスの考え方を提示した。機械的な牧師職に疑問を抱き、精神的苦悩にたえられずに辞職したのは、彼独自の神である霊の解釈を必要だと感じたからである。そのために、新宗教を創始しようという情熱がこの処女作には溢れている。エマスにとって、霊を信ずることは内なる自己を信ずることであつたと言ふことができる。霊の啓示は外部からくるものではなく、心のなかからくるものであるから、信ずることのできるものは自分だけだということになり、自恃の精神はこの処女作に明らかに読みとることができぬ。

このようにして、自然は人間精神から生まれたものになり、人間が創造したものになった。そして、人間は宇宙の中心であるということから、世界は人間のために存在するということになる。それゆゑに、人間精神のなかに宇宙秩序の統一世界を形成しようとした人間中心主義が『自然論』の原点である。

十九世紀初頭はヨーロッパでも、アメリカでも、自然にたいする関心が強い時代で、多くの文人が自然を賛美した。たとえば、ワーズワースは自然のなかに美を見出だして、その語る意味に魅惑された。また、ルソーは教育的見地から自然への復帰を説いた。しかし、この両者とも宗教的色彩に乏しく、浪漫的に自然を考えたが、エマスは自然の奥に神を発見して自然を賛美したのである。もっとも、エマスにおいては、自然は霊が人間に与えた精神との交わりを通してのみ意味をもつという信仰の領域のものであるが、理性を超越した感情、直観重視、伝統排撃、自然賛美というような点は浪漫主義と共通している。人間の頭脳を信じ、その産物である科学だけを頼りにして、科学では説明できないものもありうるということを想像できない人にはエマスの思想は、當時の一部の人びとから非難されたように一種の心霊術⁽¹⁴⁾としか思われなかつたであろう。超絶主義者としてのエマスは、つぎの文章にもっともよくあらわれている。

Whether nature enjoy a substantial existence without, or is only in the apocalypse of the mind, it is alike useful and alike venerable to me. Be it what it may, it is ideal to me, so long as I can not try the accuracy of my senses.

へりかえすが、ハヤースンの心の奥には新世界アメリカがあった。そして、新世界の人びとと同様にハヤースンは自然にたいして驚異を感じた。

When the bark of Columbus nears the shore of America;—before it, the beach lined with savages, fleeing out of all their huts of cane; the sea behind; and the purple mountains of the Indian Archipelago around, can we separate the man from the living picture? Does not the New World clothe his form with her palm-groves and savannahs as fit drapery? Ever does natural beauty steal in like air, and envelope great actions. When Sir Harry Vane was dragged up the Tower-hill, sitting on a sled, to suffer death, as the champion of the English laws, one of the multitude cried out to him, “You never sate on so glorious a seat.” Charles II., to intimidate the citizens of London, caused the patriot Lord Russel to be drawn in an open coach, through the principal streets of the city, on his way to the scaffold. “But,” to use the simple narrative of his biographer, “the multitude imagined they saw liberty and virtue sitting by his side.” In private places, among sordid objects, an act of truth or heroism seems at once to draw to itself the sky as its temple, the sun as

is candle. Nature stretcheth out her arms to embrace man, only let his thoughts be of equal greatness.

エマソンを詩人だと呼ぶことに異論はあるまい。エマソンの考え方が、結果的には楽天的すぎたことは言うまでもない。彼の過度の人間信頼も、祖先達もついていた時間に美化された幻想にすぎない。『自然論』には欠点が多い。まず、『自然論』にはくりかえしが多い。例文と主張文とが区別できないほどまざりあっている部分が多い。とくに、彼の言う普遍的な霊そのものの曖昧さと日常的な寓話や比喩が多いことが、雄弁ではあるが、説得力を弱めている。論理の飛躍と多くの古臭い屁理屈と説教調などが目立っている。しかし、最大の欠点は異なるものを、そのままには受けとらないで、共通性を探して宗教的道德的意味をそれにもたせたことである。この点に人間の本質を見失う危険性が潜んでいる。異なるということの重要性を見逃していることである。しかし、実は、故意に異なる面を無視したところに『自然論』の特質がある。エマソンの生涯そのものが幻想から出発して、南北戦争をへて夢が崩壊し、現実足にふみ入れた一個人の歴史である。ここで、エマソン教を創始しようと賭をした勝負師なのか、革新の炎に燃える熱烈な信仰心から『自然論』を書いたもう一人のエドワーズであったのかということが問題であろう。しかし、エマソンはこの両者であったというのが正しいのではなからうか。宗教改革を試みて敗れたエドワーズもエマソン同様に自然現象を神の声だと見なしてはいるが、自然を象徴としてとらえるにとどまり、エマソンのように自然の奥に霊が実在し、神と人間が直接に感応できるとは考えていない。ピューリタニズムは神を人間の運命を決定する神秘的絶対者だとみなし、人間は神の秩序のなかの汚点にすぎないと考えていた。ユニテリアニズムはキリストを人間の地位におろして、人間に自己救済力を与えた。エマソンは前述のように人間を思考の中心においたのであるが、それと同時に神の神秘性をも重視して、人間と神とを結びつけようとしたのである。彼はユニテリアニズムに不満を感じて、悟性の眼で世界を見ることをやめ、理

性の眼で世界を見て、物にたいする執着心をすてて神に近づこうと試みた。エマソンは、人間の本性を神聖で真実なものだと信じていたから、人間の本性も霊も同一の觀念にならなければならない。

『自然論』は、内容的には、第六章と第七章とに重点が置かれている。とくに、第六章では個性の尊重という思想が見られる。十九世紀の三十年代と四十年代とが社会不安の時代であったことを考えると、現実にとらわれずに、より高い精神を求める必要を説いたエマソンの主張は評価されるべきであろう。とくに、一八二〇年頃から南北戦争頃まで、アメリカ合衆国の地理的拡大、自然開発、資源発掘などによって人びとが功利的になり、ピュリタンのもつ神聖とか美徳とかいう感覚を失った時代であったから、エマソンの浪漫的アメリカ精神解放論は大きな意味をもち、アメリカ文化史上に重要な位置を占めるものだと言わなければならない。

(注)

- (1) 拙著『エマソンとソーローの研究』（昭和四十七年・風間書房刊）参照。
- (2) Kenneth W. Cammeron: Emerson the Essayist, 1945 参照。
- (3) Paul F. Bolter, Jr.: American Transcendentalism, 1830-1860, Putnam, N. Y., 1974, p. 45.
- (4) 『エマソンとソーローの研究』参照。
- (5) 同前。
- (6) 日記に散見される。
- (7) 『エマソンとソーローの研究』参照。
- (8) 同前。
- (9) Journal, 1824, 4, 18.
- (10) 『自然論』の言葉の美しさを賞賛して“a supersensuous, lyrical, and sincere rhapsody”と言った John Jay Chapman をはじめとして、その後も、これを散文詩だという見方が多々。(John Jay Chapman: Emerson and Other Essays, 1899)
- (11) 『エマソンとソーローの研究』参照。

- (12) 同前。
- (13) Joel Porte : Emerson and Thoreau, Transcendentalists in Conflict, Wesleyan University Press, 1966 参照。
- (14) 『エマソンとソーロウの研究』参照。